

五 清く正しく生き 青年教育運動に

一生をささげた郷土の光 田澤義鋪 (一八八五〜一九四二)



田澤義鋪 (田澤記念館所蔵)

みなさんは田澤義鋪という人を知っていますか。佐賀県が生んだ有名な思想家です。

「次郎物語を書いた下村湖人は、尊敬する人物に福沢諭吉、新渡戸稲造、田澤義鋪の三人をあげています。では、田澤義鋪という人は、どのような生き方をした人だったのでしょうか。

「えいっ」とかけ声をかけ、気合いを入れながら義鋪は、心をひきしめるため今日も冷たい池の水をかぶっています。父義陳は厳しい人で、義鋪をきたえるため庭の池で夏は水泳、冬は水かぶりを実行させていました。特に、冬の水かぶりは、おけに十三ばいと決まっています、たいへんつらいものでした。

明治十八年(一八八五)田澤義鋪は、父義陳、母みすの子として鹿島市城内で生まれました。八つ年上の姉ふみと二人きりの姉弟でした。小さいころから姉と二人、毎朝父の前にすわらせられ、古い中国の物語や日本の歴史を教えこまれました。ここに一つのエピソードがあります。

義鋪は小さいころから気がきいて頭のよい子でした。小学校の近くに住んでいることもあり、毎日父にせがんで小学校への入学をたのみました。ついに父は根負けして、特別の取りあつかいを校長先生にたのみこ



田澤義鋪の生家（鹿島市大字高津原）

みました。ふつうの子供よりも早く小学校へ仮入学したのです。それほど頭のよい少年でした。

その後、義鋪は旧制鹿島中学校へ進みました。中学校では読書するにも本がなくて困りました。そこで義鋪は、仲間に呼びかけ自分たちで図書館をつくりました。また、町内の学生を集め集団での勉強会もしました。勉強への興味もわいてきて、熊本の第五高等学校に進みました。五高では一つ下の学年に、下村湖人がいます。

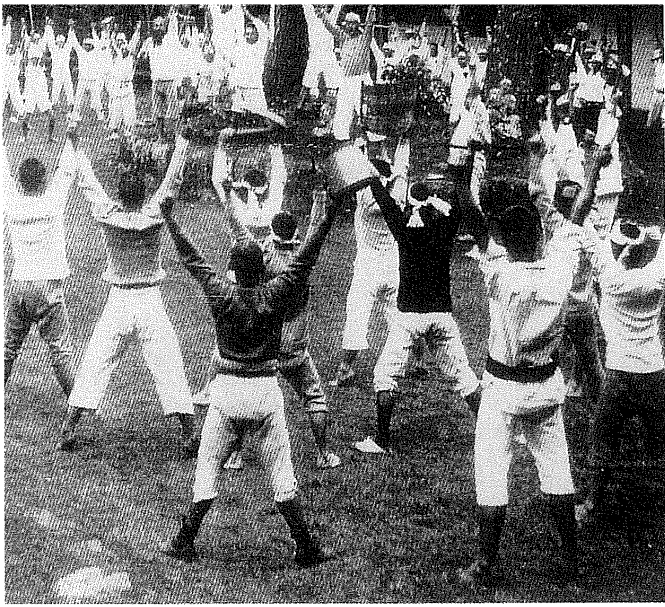
明治三十八年（一九〇五）、義鋪は東京帝国大学に入学し政治学を学び、一生けんめい勉強に力を注ぎました。また、後はいのめんどどうもよくみました。大隈重信のやしきに出入りし、

東京ろくじょう会の世話をしたのもそのころです。演説のうまさは、その当時身についたようです。

大学卒業を前に義鋪は、満州・朝鮮への視察旅行に出かけました。そこで彼は日露戦争に勝ち、わがもの顔にふるまっている日本人の姿を何回となく見ました。また、同じ人間なのに中国や朝鮮の人々を軽くみているのにはがまんできませんでした。

義鋪は、このことを大変恥ずかしく思いました。そして、

「日本が海外に発展しても、人としてのつきあいができなければ必ずきらわれる。そして最後にはどこの国からも相手にされなくなる。日本人は、もつと人としての生き方を学ぶべきだ。」と考え、政治と教育に力をつくすことを決心しました。



講習会での義鋪と青年たち（田澤記念館所蔵）

大学を卒業し、静岡しずおか県の役人として第一歩をふみだしました。安倍郡あべぐんの郡長ぐんちやうでした。郡長というのは、今の市長と考えていいでしょう。役所の仕事は、書類しよるいに目をおしたり、会議かいぎをしたりすることが中心です。義鋪は仕事のかたわら青年たちと接せつすることを心がけました。当時、農村の青年たちは、自分の将来しやうらいにあまり希望をもっていませんでした。青年たちへの教育の必要さを感じた義鋪は、勉強会をはじめ指導しどうにあたりました。昼は役所の仕事、夜は青年たちの指導と郡内を走り回りました。

これまでえらい郡長さんと話をしたことがなかった青年たちも、郡長田澤義鋪たざせいきふの熱心ねっしんさと勉強ひつようの必要ひつようさを感じてたくさん集まってきました。はじめは安倍郡の青年たちを中心に行なわれていた勉強会もしいに広まり、静岡県内へとだんだん広がっていきました。

大正三年、安倍郡内の青年たちを集めて第一回しゆくはくこうしゆかうかい目の宿泊講習会しゆくはくこうしゆかうかいが開かれました。義鋪は、青年と同じ宿舎しゆくしやにとまり、みんなでこれからの地域ちいきづくりについて話し合いました。

青年たちはやる気にみちあふれていました。今日では、このような講習会こうしゆかいはあたり前になっていますが、当時としては画期的かつきてきなことでした。

この講習会で義鋪は、「一事貫行いちじかんこう」の必要ひつようさを説ときました。これは、何か一つのことを一年三百六十五日必ず実行じつこうすれば願ねがいはかなえられるという意味です。義鋪も青年たちもそれぞれかいを立てて実行することにしました。

この講習会は思った以上の成果せいこをあげました。後にこの中からすばらしい青年団指導者が育っていきました。



田澤記念館全国青年団研修所  
(鹿島市大字高津原)

静岡で郡長として五年がすぎ、義鋪は内務省の役人となって明治神宮造営の仕事をまかせられました。彼は、この大事業にあたり全国の青年団へ協力を呼びかけました。この呼びかけに全国から一万五千人もの青年が集まりました。義鋪の自分たちに対する愛情と国を思う心に打たれ、集まってきたのです。このころから義鋪は「青年団の父」としたわれるようになりました。その後、義鋪は、理想を求めて衆議院の選挙に出ました。おしくも落選しましたが、彼の考えは広く人々に知られるところとなりました。大正十五年(一九二六)、義鋪は、日本青年団理事となり、全国青年団の中心的存在となりました。「友愛」と「創造」をその指導の柱とし、青年教育に力を注ぎました。

昭和五年(一九三〇)には、青年団について天皇へご進講を行いました。その後、大臣へのきそいもありましたが断りました。自分の進むべき道は青年教育だと考え、全国どこへでも講演に出かけました。そして、日本人が進むべき道、人としての道を説いていったのです。その教えは、今も多くの人の心に残っています。昭和十九年、義鋪は、講演先で病にたおれ帰らぬ人となりました。しかし、その精神は今もなお流れ続け、全国の青年に受けつがれています。



昭和8年に開かれた大日本総合青年団大会(田澤記念館所蔵)